

國際會議情報 —

福 井 文 雅

◎ 第 3 回中國域外漢籍國際學術會議

英語では The 3rd International Conference on Works in Chinese Outside of China と言い、1988年9月13日から16日にかけて、韓国ソウルの建國大學校とその忠州キャンパス近くの水安堡 Park Hotel とで開催された。主催は建國大學園と中華民國の國學文獻館とであった。

この第一回は日本（東京・明治大學）、第二回は臺灣（聯合報社屋）であり、その詳細はすでに本誌5號に記載したところであるので、本會議の趣旨や規模については再説しない。要するに、今回は韓国で開かれる順番になったので、陳捷先教授の努力で建國大學校が会場に選ばれたわけである。

會議組織擔當者としては、大會長には劉承潤建國大學園理事長と陳捷先中華民國國學文獻館長とが任じ、以下、準備委員長—金容漢建國大學校總長。副委員長—文濟吉、韓成均の建國大學校副總長二氏、金學主ソウル大學校教授、金三峯建國大學園管理理事。企畫—黃元九（延世大）、成元慶（建國大）、宋晞（中國文化大）、福井文雅（早稻田大）、辛勝夏（高麗大）の各教授。運営—姜勝大建國大學校總務處長、金鳳鐸、文正九、玄用淳、李秀雄の建國大學校各教授。進行—李玉（パリ大學第七分校）、林東錫（建國大）、梁必承（建國大）の各教授と韓仁熙建國大講師。出版—李柱郢建國大學校出版部長。財政—薛完建國大學園事務局長、安榮洙洪陽商社代表。渉外—金宗漢建國大學園發展企畫室長、李琪源同弘報室長。幹事—申福龍、金明壕の建國大學校二教授。

特別ゲストとして、臺灣から中央研究院院士の陳奇祿博士夫妻が招かれていた。

この他、13日の圖書展示會の爲の委員も（兼任の形もあって）15人用意されていた。

これらの方々の中でも、劉承潤理事長と金容漢總長とは常に先頭に立って來會者の接待につとめられた。理事長とは言ってもまだお若くて明朗なので、いかにも建國大學園の進展を象徴するかのようでヴァイタリティに溢れていたし、總長は日本人參會者の爲にわざわざ日本語を使って開幕式では挨拶され、時には通譯までかって出られて、我々を大いに恐縮させた。お二人のそばに付きそう韓相基理事長祕書室長（建國大學校畜産大學副教授）も、東京大學出身の實に流暢な日本語で我々を助けてくれた。

會の進行は、金學主、成元慶の兩教授が見事な中國語で、また申福龍教授が英語でつとめられた。その他數名、司會役の教授はおられたが、申譯ないことに芳名を記録しない。

受付や案内役には建國大學校の中國研究所の學生諸君が（多分中國語が話せるという理由からであろう）多く當り、また、日本からの留學生もあり、とりわけ土屋昇君達には全員がお世話になったものである。

會議日程は13日（火）から始まり、13時に建國大學校本館2階會議室で受付開始。14時に同校の理事長と總長を全員で表敬訪問して、學園紹介の短篇映畫を鑑賞。そこからバスで朝興銀行本店三階大會議室で開かれた「中華民國優秀圖書展示會開幕式」に臨んだ。スピーカーの中には、劉承潤理事長夫人（漂亮!）のチマ・チョゴリの姿もあった。18時から、教授食堂で建國大學校ソウル・キャンパスの副總長主催の晚餐會。

14日には、バスで約3時間かけてソウル南方の水安堡溫泉に着き、その「パーク・ホテル」に投宿。ここが16日まで3日間の會議の會場であった。以下に、發表論文と、その日程とを掲げる。（敬稱略）

1. 姜 信 沆：「李邊著『訓世評語』에 대하여」
2. 菰口 治：「中國漂着船尋問記錄にみえる儒者たちの意識について」
3. 金 學 主：「朝鮮時代刊『五臣注文選』에 대하여」
4. 笠 征：「關於淺見綱齊的『靖獻遺言』」
5. 福井文雅：「日本殘存古韓本『大顚和尚注心經』について」

6. 糸數兼治：「談從朝鮮傳來的琉球收藏佛經」
7. 成元慶：「韓國어있어漢字表音最初로서의『東國正韻』」
8. 町田三郎：「叢書『漢文大系』の刊行について」
9. 宋 晞：「黃景源江漢集中的宋姦臣論」
10. 吳哲夫：「海外中國古代書蹟的探尋」（代讀）
11. 王國良：「韓國漢文小說『薛仁貴』初探」
12. 王民信：「淵泉先生『東史世家』」
13. 劉兆祐：「宋代中韓兩國圖書文化交流的幾個問題」
14. 俞昌均：「韓國漢字音의形成과그性格」
15. 柳鐸一：「燕山君이賀來下命한中國小説攷」
16. 尹炳奭：「李建昇과그의『海耕堂收草』의史料的價值」
17. 李龍範：「安鼎福의『天學考』와『天學問答』」
18. 林東錫：「朝鮮時代漢語教材에 대한一考」
19. 林明德：「六美堂記與中國的關係」
20. 莊芳榮：「略論中國叢書之編刊及其對域外漢籍整理之成績」
21. 張 璉：「宋明時代對高麗日本贈與書禁初探」
22. 丁奎福：「『彰善感義錄』의儒家思想과小説史的意義」
23. 鄭樸生：「佚存日本の全浙兵制考」
24. 中村璋八：「五行大義の鈔本・刊行について」
25. 曾永義：「『項王祠記』所引發的問題」
26. 陳慶洗：「『牡丹燈記』研究」
27. 陳捷先：「朝鮮『中京志』研究」
28. 陳泰夏：「『鷄林類事』의板本考」
29. 車柱環：「『桓檀古記』考」
30. 札奇斯欽：「從熱河日記看十六世紀韓國知識份子對中國各民族的態
Jagchid,
Sechin 度」
31. 川勝 守：「將軍吉宗の實學的漢籍の輸入と『名家叢書』」
32. 芦田孝昭：「再論明之閩本及其環境」
33. 洪瑀欽：「寫本『東坡源流』考」

月 日		九月十四日（水曜日）					九月十五日									
日 程		開 幕 式	第 一 次 議 會	第 二 次 議 會	歡迎パ ーティ	第 三 次 議 會	第 四 次 議 會									
時 間		13:30 ～14:30	15:00 ～16:00	16:20 ～17:20	18:00 ～20:00	09:30 ～10:30	10:50 ～11:50	12:00 ～13:30								
第 一 分 科	司 會 者	建國大學校 忠州校舍副總長 招請午餐會	黃（延世大） 元	宋（中國文化大） 晞	建國大學校 總長 招請	陳（臺灣大） 捷	車（檀國大） 柱	羅昌柱（建國大學校中國問題研究所長、國會議員） 招請午餐會								
	發 表 者		九	晞		先	環									
第 二 分 科	司 會 者		陳（臺灣大） 捷	尹（仁荷大） 炳		李（東國大） 龍	車（檀國大） 柱		孤（福岡教育大） 口							
			先	夷		範	環		晞							
			金（ソウル大） 學	主		福（早稻田大） 井	文		雅	丁（高麗大） 奎	福	俞（啓明大） 昌	均			
			陳（福岡大） フランス、C N R S） 慶	浩		征	曾（臺灣大） 永		義	沆	姜（成均館大） 信	泰	元	慶	夏	成（建國大） 明（知大） 泰

第3回中國域外漢籍國際學術會議（福井）

(木曜日)			九月十六日（金曜日）					
第五 次 議 會	第六 次 議 會	第七 次 議 會		第八 次 議 會	第九次會議	閉幕式	觀 光	
13:40 ～15:00	15:20 ～16:40	16:50 ～18:10	18:30 ～20:00	09:30 ～10:30	11:00～12:00	12:00 ～12:30	14:00 ～18:00	
全(仁荷大) 海 宗	李(東國大) 龍 範	札(ブリガム・ヤング大) シヤグチド・セチン 奇ス・欽	建國大學園 理事長 招請 晚餐會	鄭(淡江大) 樑 生		金在光(建國大學園理事、 國會副議長) 招請 午餐會	彈琴臺→ソウル 夕 食	
鄭(淡江大) 樑 生	黃(延世大) 元 九	王(中(駒澤大) 臺(臺灣大)村 民 信		洪(九州大) 鎮(鎮南大)田 瑀 三 欽 郎				
芦(早稻田大) 孝 昭	金(建國大) 一 根	町(九州大) 田 三 郎		陳(フランスCNR) 慶 浩	姜(建國大) 成(成均館大) 元 信 沆 慶			
福(故宮博物院) 吳(早稻田大) 哲 文 雅	丁(高麗大) 糸(沖繩縣立圖書館) 奎 兼 治 福	川(ROC國立中央圖書館) 張(九州大) 勝 守 璉		王(東吳大) 柳(金山大) 國 鐸 良 一	芦(早稻田大) 林(中國文化大) 明 孝 昭 德 均			

34. 黄元九：「黃胤錫斗亂藁」

これら名の他に、成澤勝（現在、神田外語大學助教授）氏のように事務手続き上の行き違いから出國できずに不参加になった人や、吳哲夫（故宮博物院）氏のように代讀で済ませた方もあった。そして、言うまでもなく、これらの人々の他にも、事務局や傍聴者計10數名も参加していた。

以上の研究發表の内容については、ここでは特に云々しない。ここでのみならず、國際會議の報告では、發表を一々紹介することを私は（原則として）しないことにしている。何故ならば、第一には、紙幅の制限があつて、一々をたとえ要旨にし紹介するのは不可能だからである。また現場では、全部の發表を聞くことなど不可能である。となれば、いきおい自分の主観や好みで選んだ發表のみを紹介せざるを得なくなるわけで、それでは客觀的な報告にならなくなる恐れがあるからである。たとえしたとしても、多くの發表者は、議事録公刊に際して多かれ少なかれ内容を修正したり、全く改變したりするものである。そうなれば、内容紹介の報告などナンセンスになってしまう場合もある。

以上のようなわけで、國際會議の報告記事のなかでは、發表内容はいずれ刊行の議事録に譲って多くは觸れず、當日出席出来なかった方々の爲に、會議全體の雰圍氣や特色を描くように、私は平常心をかけているのである。

ただ、内容について全く言及しないわけにもいかないとすれば、全體共通のテーマがとにかく決っている爲に、中・日・韓三國間の漢籍の流通史という點では、他所では得られない極めて有益な發表が多かった。とりわけ我が同朋の發表がそうであったことは、誠に同慶の至りである。

發表に關連して上掲の表などを見て、不審に感じられる方々の爲に私事に觸れざるを得ないが、私が企畫委員や祝辭を述べる幹事に當てられていることは、實は現地に着くまでは、つまり、プログラムを會場で渡されるまでは、全く豫想もしないことであった。どうしてこのような決定になっていたのか、今もって私には判らないのであるが、しかし、このお蔭で私は様々な仕事をさせられることになってしまった。先ず初日には、日本からの参加者全員の紹介をさせられ、また、大急ぎで祝辭原稿を一晩で書かねばならなかった。國際會議では、

この種のハッピングは起り勝ちで、何回となく私は體驗していることなので、突然の指名でも特に慌てはしなかったが、そのような場合に私がいつも心がけるのは、どうしたら日本人同伴者の、大袈裟に言えば日本國の名を傷つけずにできるか、という問題であり、今回もそれに配慮した。そのような心配をする、つまり恥をかく恐れがあるのならば辞退すれば良いではないか、と言う立場もあるだろうが、しかしそれでは、要するに“逃げている”“敵にうしろを向ける”ことでしかない（國際會議は友好の場であり、又、自己主張のぶつかり合い、自己顯示の競争、つまり一つの戦いの場でもある。）しかも辞退しては、何と云いつくろうと、それが逃げであることは相手には見え見えであるから、それこそが恥辱になり、憐みの対象でしかない。

と言うわけで、私は御愛嬌として韓国語・中國語を混えたり、來韓の飛行機の中でたまたま讀んだ8月23日付 *Le Monde* 「ル・モンド」紙の漢字文化圈に關する佛文記事 *La marque de Confucius* 「孔子の痕迹」を英譯し引用して、挨拶文を構成した。英文だけの挨拶では當り前で、韓・中の學者の前ではいかにも藝が無いやり方だと考えたからであり、日本國の名譽の爲に、ハッピングへの對應としては、極力努力したつもりである。

その成否は別として、私個人としては、折角の楽しかるべきソウルの一夜を、宿舍の一室でひとり祝辭原稿を書くうちに失ってしまったという残念さは残っている。

宿舍と言えば、外國人來會者には實に得難い宿舍を建國大學校は用意しておいてくれた。それは、12・13兩日と、水安堡溫泉から歸ったあとの16・17兩日に泊った建國大學校教職員アパート「宇成 ATP 202 棟」である。それは全く新築・未使用のアパートで、建國大學校の南、裏口校門に近く、漢江をはさんでオリンピック・スタジアムがすぐ前に見えた。オンドルの入る韓式住居であり、外國人の我々にはまことに得難い経験ができた。

會議場からソウルへ戻った翌日の17日がソウル・オリンピックの開會式當日であった。私は糸數、芦田の兩氏共々、そのアパートの一室から、テレビで開會式のスタジアムの内側を、ベランダから目前にその外側の進行を實際に見る

ことが出来た。そこまで考えて主催者側が我々に宿舎を提供してくれていたとするならば、その配慮は驚嘆すべきものである。

水安堡温泉での生活も楽しいものであった。いかにもひなびた温泉であり、上等の韓式料理が出て、夜は庭園の中の酒店で、ピンデットをとり、マツコリをくみかわしつつ、遅くまで談笑が続いた。

議事録には決して載らない以上のような出来事から垣間見て、この會議へ参加した我々の収穫と喜びとが讀者に傳われれば、主催者も満足されることであろう。

なお、この會議については、既に町田三郎教授が『九州大學中國哲學論集』第14號（1988・10）に「中國域外漢籍國際學術會議」のこと、という報告を寄せ、張璉女士も『漢學研究通訊』第七卷第四期（1988・12、臺灣）pp. 249-251 に、全發表の要旨を載せている。

◎ 東アジア知識人會議

この會議は今回が初めてではないが、今回は「東アジアの經濟發展とその文化的背景」をテーマに、1988年12月5日（月）から8日（木）まで、經團連會館（東京・大手町）の11階國際會議場と10階の會議會場とで開かれた。主催は社團法人・日本經濟調查協議會で、その開催趣旨は以下のようなものである。

「1970年代以降、東アジア地域の韓國、臺灣、香港、シンガポール等の經濟發展には著しいものがあり、今やアジアの4龍あるいは4虎などと呼ばれ、世界の注目を浴びている。日本を含めて、アジアのこの地域は現在の地球社會の中で最も際立った存在である。

そして、タイやマレーシア等 ASEAN 諸國も踵を接してこれら地域に追隨しつつあり、さらに開放政策を採用した中國の經濟發展も今後大いに期待される。中國は、多少の試行錯誤はあろうが、今後その政策宜敷きを得れば10億を超える人口を擁する、洋々たる巨大な發展の夢を秘めた國である。

アジアの4龍、中國、ベトナムそして日本を含む東アジア地域は、西歐社

會とは異なる特殊な文化圏として一括しうる共通な文化基盤をもっている。即ち、儒教や老莊思想、大乘佛教そして祖先崇拜という共通な思想や價值觀を持ち、また漢字を使用し、生活習慣としても箸を使う民族である。

しかし、西歐の諸民族と對比して以上のように共通した面があると同時に、個別・仔細に検討すれば、民族それぞれに異なった歴史、傳統および民族意識をもっている。また同根の儒教や佛教思想も各々異なった特色を持っていることも看過できない事實である。それに加えて中國、北朝鮮、ベトナムのような社會主義を國とする國々と、日本、韓國、臺灣等のような自由主義社會の地域に分斷されており、イデオロギー的對立も激しかった。

ところが最近中國はもとより、社會主義の本来たるソ連までがペレストロイカを高唱している。中國は一國家2經濟體制を公表し、イデオロギーや教條主義にとらわれない國造りを開始している。東西關係が對立から次第に協調に向かって前進しつつある現象は、東アジア地域の發展にとって一つの大きな轉機をもたらすこととなるものと期待される。

このように最近の東アジア地域の政治・經濟・社會の變化と發展はまさに瞠目すべきものがある。われわれは東アジア地域のこのような發展が單に限られたこの地域や經濟の分野だけでなく、またその繁榮が槿花一朝の短命に終わるのでなく、世界人類文化の向上に對して如何なる意味を持つのかという長期的視點に立って、東アジアの繁榮と文化的背景について考察しようとするものである。」

そして、具體的な議事日程は次のようであった。

12月5日（月）

開　　會　　式　　13：30～14：30

開　　會　　の　　辭　　鈴木　　治雄　（社）日本經濟調查協議會代表理事

趣　　旨　　説　　明　　宮脇　　長定　（社）日本經濟調查協議會専務理事

基　　調　　報　　告　　14：30～17：00

『東洋の傳統文化と現代化』

李　　　　愼之　　中國社會科學院副院長（北京）

『東洋思想と西歐思想』

中村 元 東京大學名譽教授

12月6日(火)

第1セッション 10:00~12:00

『大乘佛教の現代的意義』

〔議長〕鎌田 茂雄 愛知學院大學

〔報告者〕金 知見 江原大學(ソウル)

宮坂 宥勝 (前)名古屋大學

〔討論者〕西 勝 明治學院大學

山折 哲雄 國際日本文化研究センター

第2セッション 13:30~18:00

『儒教の現代的意義』

〔議長〕源 了圓 國際基督教大學

〔報告者〕牟 鍾鑑 中央民族學院(北京)

唐 富藏 中央研究院(臺北)

島田 虔次 京都大學名譽教授

〔討論者〕溝口 雄三 東京大學

相良 亨 共立女子大學

12月7日(水)

第3セッション 10:00~12:00

『老莊思想の現代的意義』

『アニミズムとシャーマニズム』

〔議長〕伊東俊太郎 東京大學

〔報告者〕許 抗生 北京大學(北京)

梅原 猛 國際日本文化研究センター

〔討論者〕池田 知久 東京大學

山折 哲雄 國際日本文化研究センター

第4セッション 13:30~18:00

『東アジア文化圏の經濟發展』

〔議長〕宮田 滿 (前)筑波大學

東アジア知識人會議（福井）

〔報告者〕 陳 其南 香港中文大學（香港）
金 日坤 釜山大學（釜山）
林 明德 中央研究院（臺北）
渡邊 利夫 東京工業大學
〔討論者〕 王 崧興 中部大學（愛知）
松本 繁一 アジア經濟研究所
渡邊 長雄 經濟評論家

12月8日（木）

第5セッション 10:00～12:00

『東アジア地域の經濟交流と環太平洋』

〔議長〕 大來佐武郎 （元）外務大臣
〔報告者〕 史 敏 中國社會科學院（北京）
篠原三代平 東京國際大學
〔討論者〕 坂本 正弘 神戸市外國語大學
鳥居 泰彦 慶應大學

總括・閉會式 14:00～16:30

總 括 各地域代表
梅原 猛，篠原三代平，宮脇 長定

閉會の辭 鈴木 治雄

懇 親 會 17:00～19:00 經團連會館 1002號室

實は、私は或るセッションの討論者となるように開催事務局から依頼を受けたのであるが、このあとで述べる「日・中宗教文化の交流」の東洋學第一部會の準備に忙殺されていた頃であり、辭退していた。しかし、その依頼をきっかけにこの會議の5日と7日、そして最後の總括・閉會式と懇親會とは出席した。従って、以下に述べるのは全體像ではない。プログラムには「なお、ホーチミン市より Dr. Nguyen Xuan Oanh（グエン・スアン・オアン）國會議員、ハノイ市より Mr. Nguyen Van Ich（グエン・バン・イク）内閣官房副長官（對外經濟關係擔當）兼國家科學技術連合會會長 兩氏が出席豫定」とあったが、

それが實現したのかどうかは確かではない。議事録が市販されるかどうかは知らないが、とりあえずのところでは、『中外日報』紙の1989年1月29日號にかなり詳細な報道があるので、詳しくはそれについて見られたい。

さて、私の見聞できた範囲での所感を書くならば、開會式で鈴木治雄、宮脇長定兩氏の述べられた問題點の趣旨説明には感心させられた。唯、中國についての事實關係や現状認識については、私の目からはいささか古色のついた話のように聞える點もあったが、しかし、戦前・戦中の漢學の教育を受けられた方であり、現在の専門家の中でも同様な方は少なくないのであるから、それはむしろやむを得ないことであった。私は、兩氏の問題提起の眞摯な姿に感心したのである。

お二人ばかりでなく、主催者側が、今後の世界經濟と嚴しい國際政治とを生き抜く爲に東アジアの文化・思想をいかに生かすべきか、という問題を熱心に考える姿は、現在の東洋學の専門家の中にはあまり見かけない。しかしそれだけに、“専門家”として意見を求められた數人の答えが、時代感覺を缺落した空理空論、相い變らずの“東洋思想萬歳”であったことは、主催者の御努力に比してはまことにお氣の毒な状況であったように私には思われた。

例えば、東洋思想の現代的意義の問題がそれである。東アジア諸國の中でも、儒教をかつて採り入れたことのある國々が、著しい經濟發展を現在とげている事實がこの數年來内外で話題になっている。その結果、「やはり儒教は立派な教えなのだ。これからは歐米一邊倒でなくて、儒教をも學ぶべきだ」という發想が出てきて、事實、そのような著書も論評も出ているが、少し考えて見れば、問題はそのように單純ではない。簡単な例を舉げて見れば、同じ儒教文化圏であったはずの中國大陸と臺灣とが、現状では、前者は相い變らず後進性に悩み、後者は富裕を誇るようになった理由が、以上の論理からは判らないのである。むしろ、現在繁榮をとげた國々は、儒教を批判しつつ、一度は歐米流の改革を経験している事實にこそ着目すべきなのであって、舊來の一思想で社會の變革が出来るような考え方は、餘りにも机上の空論でありすぎる。

その點、さすがに臺灣からの出席者自身から批判が出ており、中央研究院近

代史研究所の林明德氏の分析などの方が傾聴すべき意見を含んでいた。（「林明德」の姓名の研究者は臺灣には多いので、他の人と混同しないように注意が必要である）

「東洋思想の現代的意義」といったテーマの場合、発表者のほとんどは、儒教（もしくは佛教、道教）は現代にもこのように重大な意義を持つ、という方向に話を持って行く。しかし、本當に彼等は御自分自身でもそう信じているのであろうか？ たまたまそのようなテーマの発表を依頼されたので、儒教（佛教）の思想からテーマに合いそうな部分を切りとって來てツジツマを合わせているだけに過ぎないのではないか？ といった疑念が、その種の発表會に出席するたびに、私の腦裡からは去らないのである。

儒教の本家本元である中國大陸が何故今でも立ち遅れているのか？ 儒教（佛教）を奉じて現代社會の發展はあり得るのか？ といった、いわば儒教（佛教）の短所を問題にした講演會や發表のあったことをあまり聞かない。東洋思想を専門にする人がその價值を否定してしまったのでは、自分の一生を否定することにもなりかねないので、その良い點ばかり探し出して言いたがる心理は判らないでもないが、それは所詮が感情論でしかなく、そんなことでは、今後の國際社會を生き抜く爲の指針になど、到底なりはしないであろう。

現在の國際社會は、本稿の前章（59ページ）でも書いたように、自己主張の戦いの場である。また、現在我々が良しとしている西歐型民主主義は個性尊重、人權尊重の理の上に立っているし、事實、近代化したと言われるアジアの社會は、その方向で動いている。しかし、そのような生き方は、儒教や佛教とは全く相い入れない方向なのである。そこに「だからこそ儒教（佛教）の見直しが必要なのだ」という意見が生れる理由もあるわけであるが、東が良いのか、或いは西が優れているのかといった舊態依然たる形式の議論ではなくて、あくまでも近代民主主義を基盤にすえて、舊來の佛教や儒教はそこに對してどのような、どれほどの寄與が出来るのか、或いは、障害になりこそすれ、寄與など出来ないのか、といった問題を今後は議論すべきではなからうか。儒教や佛教の否定的面を示さないで、“有難い”“萬歳々々”の話では、現實には何ら効果をもたらさない。

と言うと、本場の中國や韓國からの“お客さん”を前にしては、たとえ眞實

でも儒教の否定的側面は發言しにくいではないか?! という批判もあるようである。しかし、あまり心配するほどのことはない。儒教や仁や義などを持ち出すのは、いわば彼等にとっての建て前論、面子の問題なのであって、現實に、儒教でもって共產主義や三民主義にとり替えようなどと、彼等にしても本氣に（聰明であるならば）考えているはずがないからである。

私がたまたま聴いた7日午前の第3セッションの發表内容は、ひどい暴論であり、たまりかねて私は批判の發言をしたので、ここに報告しておきたい。

それは梅原猛教授の「アニミズム再考」の議論である。發表ペーパーが配られたので、そこから結論的斷言の文を引用すると――

（「山川草木悉皆成佛」という）言葉はもともと中國天台の言葉であり、道教に由來するものだと言われるが、まさにそれはいつの間にか日本佛教の中心思想になってしまったのである。

この「山川草木悉皆成佛」という言葉は、まさにアニミズムの思想そのままである。それは明確な自然崇拜であり、樹木崇拜である。動物崇拜はそこでははっきりと語られていないが、もちろんそこには動物崇拜も含まれるであろう。（pp. 7～8）

この議論のどこがおかしいかを一々述べる必要はないが、簡単に言えば、「成佛」の二語の持つ思想的比重を、教授は完全に見失っているのでこのような立論になったのである。「道教に由來する」の部分も質問したところ、「それは友人の福永君の説であり、福永君が間違っていれば私も間違っていることになる」という答えであった。閉會後に或る中國人學者が、「梅原先生の論は他人からの借り物ばかりで、御自分の説がありませんね」と、笑いながら私に言われたものである。教授は福永先生と私との論争（日本道教學會機關誌『東方宗教』Nos. 60～62, 1982・10～1983・10所載）をどうやら御存知ないらしい。この論争は、研究者の間では周知である。

梅原教授は續けて更に次のようにも言う、

日本の宗教は、神道はもちろん佛教もアニミズムの影響を強く受けているというより、アニミズムそのものであるということになる。〔中略〕

確かにそうである。日本の宗教は、神道はもちろん佛教すらアニミズムの段階にとどまっている。しかし、それは決してスキャンダルではない。それはむしろ健康な宗教のしるしなのである。（p. 9）

こういう議論を日本の佛教學者や宗教者が認めるであろうか……。

以上のような論は、これがもしも他の場所であったならば、素人の暴論として私は無視したであろう。しかし、「東アジア知識人會議」の場で、中國大陸と臺灣兩側からの漢人學者やヴェトナムや韓國その他諸國からの参加者もいる前で、このような説を、しかも「國際日本文化センター（所長?）」の肩書の教授が公言されたのでは、私は黙って聞きすごすわけにはいかなかった。早速發言を求めて、「こういう國際會議で、日本の學界では到底公認しそうもない説を公言してもらったのでは、それが日本人の間の定説かと誤解されかねないので、私は批判的コメントを提したい」と前置して、その説が全く認め難い理由を列挙した。優れた同時通譯者が中國語に譯して全員に伝えてくれたことは幸いであつた。他の日本人専門家傍聴者達は、何を怕れてか一言も批判の發言をしなかったのも、たまたま私がそこに出席していたことは發表者にとっては不幸であつたが、日本國にとっては大なる幸いであつたと思う。

北京大學副教授の許抗生氏の發表も疑問の多いものであつた。口頭發表の中では略されたが、配布のフル・ペーパーの中には『六祖壇經』を引いて、

慧能説：我此法門，从上已來，頓修皆立无念为宗（後略）

と書かれたので、オヤッ？ と疑問を抱いた。この「頓修」は「頓漸」の誤りではないか、と思ったからである。そこで私は、「これは些細な問題かもしれないが、慧能の思想全體に關してはむしろ重大な誤りに關するので、つまり問題の核心に觸れる誤りなのでお訊ねしたい」と中國語で發言したのであるが、梅原教授への質問に時間をとりたかつたので、「それはあとで個人的に……」として中途でとりさげたものである。

或る中國人學者は、「福井さんはこまかい問題を出しましたね」と後で批判がましく話しかけて來たが、しかしそれはそう言う當人が無知なだけであつて、頓漸を頓修のままで濟ませていられるような發表者は、慧能について、まして

「禪學思想」についてなど、發言できる資格はないのである。許教授は慧能の思想をもとに「現代人的心理健康」について廣大な議論を展開して見せられたのであるが、上述のような一知半解の知識では全てが砂上の樓閣に歸するのである。「一事が萬事」である。

日本の國際會議や公開講演では、批判的發言を聞くことは稀れである。従って、私のような歐米流に卒直な發言者は、今後は主催者から出席を敬遠されるかもしれないが、しかし、歐米の場合では状況は全く逆になる事實は覚えておいて欲しい。そこで、折角の會なのであるから、今後は、現實を直視した、本音の吐ける専門家を、多數參會者の中に加えてくれることを主催者には要望したい。それにしても、出席の機會を賜わった主催者側の常務理事・事務局長石川利直氏と、當日、私の發言を心よく許可して下さった伊東俊太郎議長、また賛意を表された池田知久教授には、この場を借りて御禮申し上げたい。

◎ 日・中宗教文化の交流

日本とフランスとの間に、3年おきに交互に會場を提供して學術シンポジウムが開かれている。フランス語では Les Colloques franco-japonais groupés と稱するが(以下、コロックと呼ぶ)、その第5回目が1988年10月3日から13日まで日本で開かれた。東京の日佛會館には23の関連學會があるが、その中の「日佛東洋學會」も“東洋學”としてそれに參加した。

その時、東洋學第一部會が扱ったテーマが、この「日・中宗教文化の交流」Les échanges culturels entre les religions chinoises et japonaises である。

會議の開催については、日本・フランスの双方から先ず一名ずつ「責任者」responsable が出て、二人の協議で全てが進行することになっている。そして、開催國に屬する責任者がイニシアチヴをとるのが原則である。

前回1985年のパリでのコロックでは、フランス側責任者はクリストファ・シペール教授、日本側責任者は私であったが、今回の開催は、そのいわば返禮の

意味も含まれていた。そこで、前回行くべくして行かれなかった酒井忠夫先生（筑波大学名誉教授、元・日本道教学会会長）を日本側代表にお願いして、次のような方々の参加があった。（五十音順・敬称略）

秋山光和（日佛会館學術委員会委員長、東大名譽教授、學習院大學教授）芦田孝昭（早大教授）伊藤 聰（早大・院）石井公成（早大講師）石田憲司（國土館大學講師）石田秀實（八幡大學助教授）今枝二郎（大正大學教授）榎 一雄（東洋文庫理事長、東大名譽教授、日佛東洋學會會長）遠藤克己（文學博士）大久保良峻（早大・院）岡崎由美（早大専任講師）柿市里子（東洋大學東洋學研究所勤務）門屋 溫（早大・院）金岡照光（東洋大學教授）狩野直禎（京都女子大學教授・文學部長）神田信夫（明治大學教授、東方學會常務理事）京戸慈光（コレージュ・ド・フランス・アジア研究所勤務）楠山春樹（早大教授、日本道教學會會長）栗原圭介（大東文化大學名誉教授）小林正美（早大教授）齊藤襄治（立正大學前教授）坂出祥伸（關西大學教授、第一部會關西地區世話人）佐藤成順（大正大學教授）澤井啓一（早大講師）白戸わか（大谷大學名誉教授）菅原信海（早大教授）高橋稔（東京學藝大學教授）田中文雄（大正大學講師・第一部會會計幹事）ユベール・デュルト（フランス極東學院・『法寶義林』編集主幹）館野正美（日本大學専任講師）中村璋八（駒澤大學教授）成瀬隆純（早大講師）平井有慶（大正大學講師）廣川堯敏（大正大學専任講師）福井文雅（早大教授、日佛東洋學會代表幹事）堀池信夫（筑波大學助教授）前田繁樹（早大助手・第一部會庶務幹事）増尾伸一郎（大阪女子短大専任講師）松本浩一（圖書館情報大學専任講師）三崎良周（早大教授）宮本袈裟雄（武蔵大學教授）宮田 登（筑波大學教授）宮澤正順（大正大學専任講師）村山郁子（東洋大學副手）山田利明（東洋大學専任講師・第一部會總括幹事）遊佐昇（明海大學講師）

以上の他に、事務局員として、早大大學院（東哲）から岩崎日出男、垣内景子、二階堂善弘、明神洋、森由利亞、山田均、流王法子、デアヌ・フローリン、東洋大學文學部から齊藤明美、大正大學大學院から吉田敏行、の計10名が参加し、總括幹事に山田利明、庶務幹事に前田繁樹、會計幹事に田中文雄が當り、福井が事務局長をも兼ねた。また、石田憲司、京戸慈光、増尾伸一郎、遊

佐昇の4氏も協力を惜しまれなかった。事務局の若い10名は、中國語・フランス語・英語のうちの少なくとも一ヶ國語に堪能な學生を公募して集めた。

フランス側参加者は次のようである。(ABC順・敬稱略)

- 1) ブリゼット・ベルチエ 夫人 (國立學術研究センター研究員)
- 2) ベルナル・フランク (コレージュ・ド・フランス教授, フランス學士院會員, 日本學士院客員會員, 元東京・日佛會館學長)
- 3) ジャック・ジェルネ (コレージュ・ド・フランス教授, フランス學士院會員)
- 4) 同上・夫人
- 5) カロリーヌ・ジスニヴェルマンド 夫人 (國立學術研究センター研究員)
- 6) イザベル・ドニラニゲロニエール夫人 (エクス・マルセイユ大學教授)
- 7) 同上・夫君
- 8) 廊慶歡 女史 (國立學術研究センター研究員)
- 9) クリスチヌ・モリエ 女史 (「道藏研究プロジェクト」研究員)
- 10) ジャンノエル・ロペール (國立學術研究センター研究員)
- 11) クリストファ・シペール (フランス國立高等研究院第五部門教授, 東洋學第一部會・フランス側責任者)
- 12) レオン・ヴァンデルメルシュ (フランス國立高等研究院第四部門教授, 元東京・日佛會館學長)
- 13) 同上・夫人

なお、以上の参加者名簿には、第一部會主催の3日夜の歓迎レセプションのみへ参加した日佛の數十名や、その他東京での関連會合に参加した方々、また、後援・協賛團體からの招待來會者等が入っていないが、詳細は刊行豫定の第一部會議事録に掲載する。東洋學第一部會の議事日程は下記のものであった。

10月2日(日)

19時 第一部會フランス側参加者集合(東京・六本木「レ・シェー」)

10月3日（月）

13時 東洋學第一部會，初會合〔東方學會二階會議室。東方學會による晝食招待〕。東方學會理事長の護雅夫教授と常務理事神田信夫教授，そして柳瀬廣事務局長以下事務局が接待に當られた。

18時 東洋學第一部會主催・歓迎レセプション（國際文化會館ホール）——ドニコッセ＝ブリサック夫人（フランス外務省文化學術部長），ジャン＝ミッシェル・ソラント（フランス大使館文化參事官），山本達郎（日佛東洋學會名譽會長）夫妻，日佛會館，東洋學の諸學會，宗教界などの役員諸氏の他，終了直後の國際會議『儒教とアジア社會』の日・佛の出席者も來會して，總勢約百名。

21時 日佛參加者合同夜食會—「南蠻亭別館」（六本木）

10月4日（火）

16.00～17.00 日佛コロック・東洋學第一部會 開會式

會議の會場・宿舍：①朝日生命セミナーハウス「一碧」

②東販「トークル・いっぺき」別館〔兩者隣接し，どちらも静岡県伊東市郊外。主會場は①の大研修室〕

〔以下の表中，フランス語と共に使われた用語を附記した〕

（總合司會：福井文雅）

發表者と發表題目	對 論 者	議 長
10月5日（水）		
9.45～11.00 〔基調報告 その一〕		
① ペルナール・フランク「繪札のお札」（日本語）（スライド付き）	a. 白戸わか b. 京戸慈光	秋山光和
11.30～12.30 〔基調報告 その二〕		
② 酒井忠夫「中國宗教文化（符呪文化）の日本への影響」（英文）	a. K. シペール b. 中村璋八	榎 一雄
14.00～15.00		
③ 坂出祥伸，増尾伸一郎 「中世神道と道教」（中文と日文）	a. B・フランク b. 酒井忠夫 c. 菅原信海	狩野直禎

15.00～16.00		
④ 中村璋八 「陰陽道の史的展開」(中文と日文)	a. 遠藤克己 b. 宮本袈裟雄 c. 増尾伸一郎	坂出祥伸
16.30～17.30		
⑤ レオン・ヴァンデルメルシュ 「儒教・道教の思想交渉上における玄學」(日本語)	a. 栗原圭介 b. I・ド＝ラ＝ ゲロニエール c. 舘野正美	楠山春樹
10月6日(木)		
9.30～11.20		
⑥ 三崎良周 「中國・日本の密教における道教的要素」(ロペール氏全文通譯)	a. J.-N. ロペール b. 成瀬隆純 c. 田中文雄	金岡照光
11.30～12.30		
⑦ ジャン＝ノエル・ロペール 「佛教の論義について」(日本語)	a. 白戸わか b. H. デュルト c. 福井文雅	B. フランク
14.00～15.00		
⑧ クリスチヌ・モリエ 「洞淵神呪經の儀禮の傳統」(英文)	a. 宮澤正順 b. 石田秀實 c. 松本浩一	山田利明
15.00～16.00		
⑨ イザベル・ド＝ラ＝ゲロニエール 「明代迄の道教文獻に見える太極の概念の位置づけと意味」	a. L・ヴァンデルメルシュ b. 石田秀實	福井文雅
17.00 伊東市内での夕食と海邊散策		
10月7日(金)		
9.30～11.00		
⑩ 宮田 登 「日本民俗信仰に現われた符呪」	a. 坂出祥伸 b. 廣川堯伸	酒井忠夫
11.30～12.30		
⑪ ブリジット・ベルチエ「福建省の神話とシャマニズム」(英文)	a. 鄭 慶歡 b. 高橋 稔	K. シペール
14.00～15.00		

日・中宗教文化の交流（福井）

⑫ カロリーヌ・ジスニヴェルマンド 「ギメ美術館所蔵の中國儀禮繪畫のコレクシオンについて」（英文）	a. 狩野直禎 b. 堀池信夫	L. ヴァンデルメルシュ
15.00～16.00		
⑬ 鄭 慶歡 「民間演劇に於ける王昭君：民俗學上の新資料」（中國語）	a. B・ベルチエ b. 芦田孝昭 c. 高橋 稔	J.-N. ロベール
16.30～17.30		
⑭ クリストファ・シペール 「靈寶科儀的形成」（英文）	a. 小林正美 b. C・モリエ c. 山田利明	I・ド＝ラ＝ゲロニエール

17.30～18.00 第一部會 閉會式。

19.00～深夜 閉會パーティ。日本・中國・フランスのカラオケ交歓會。

10月9日（日）

18時 第一部會は、日本中國學會・懇親會（會場：東京プリンス・ホテル）に來賓として招待された。

10月10日（月）

13時 日本中國學會年次大會と日本中國學會設立四十年記念 シンポジウム
～15時 「中國學の未來像」を傍聴（會場：大正大學）。コロック参加者の中から、レオン・ヴァンデルメルシュ、福井文雅、田中文雄の三名が討論に参加。コロック参加者では、今枝二郎と宮澤正順、渡會 顯の三名が大會開催者。

16時30 歌舞伎座觀劇（二階正面一等席三列）

～21時30

10月11日（火） 第一部會参加者から數名、京都市行き。

18時 日佛東洋學會關西地區會員主催歡迎會（會場：桃園亭。世話人：坂出祥伸教授）

10月12日（水）

10時～12時 京都・佛教大學佛教會講演會：

L. ヴァンデルメルシュ教授：「いわゆる文言文の起源と特性」（日

本語)

10月13日(木)

16時 日佛コロック 全體閉會式

20時 日佛コロック・東洋學第一部會「さよならパーティ」。第二部會責任者のルイ・バザン教授(見事なシャンソン!)と濱田正美氏も交えて(赤坂「ピアノ・サロン “ラムール”」)。

コロック終了の當日(13日)午前中には、恒例として、責任者のみが集まっていた「反省會」が日佛會館學長室で開かれた。その時には、責任者はそれぞれフランス語で議事経過を報告するのであるが、その報告は、のちに日佛會館の機關誌『日佛文化』特集號として一括刊行される。以下は、その爲に書いた佛文報告の邦譯である。本コロックについては、いづれ『東方宗教』74號に、一層詳しい報告を載せることになっているので、ここでは『日佛文化』用の報告の轉載で全てを終えることにしたい。

「東洋學第一部會については、つぎの四點を特記しておきたい。① 発表の内容に従って、それに關連する高名な日本人専門家を對論者としてお招きした。東洋學で研究領域を異にする學者が、年令・所屬機關・地位に拘わらず、かくも多くが一堂に會することになったのは、日本では、稀有の事である。第一部會の代表者の酒井教授は、日本における中國學者と日本學者との眞の出会い、我々の部會で初めて實現した、と斷言している。② 參加者は、三日の歡迎レセプションだけの出席者も含めて、この機會に世界的に高名なフランスの學者と遇って、意見を交換出來たことを極めて喜んでいる。③ 參加者の研究歴が様々であり、また、テーマが學際的であつた爲に、會議中の公用語も單にフランス語だけには限られなかつた。(日佛間のコロックである以上)日本語の使用は當然であつたが、フランス側の多くと日本の事務局學生達や若手研究者との間では、むしろ中國語での處理や討論が日常化していったようである。もしもフランス語だけに限定していたならば、フランス滞在の経験者の言わば友好會、限られた人々だけの會合に終つた、と言う批判を被つたかもしれない。因みに、英語は第四外國語の感さえあり、時代の移り變わりの大きさと共に、今後のコ

ロックへの日本人中國學參加者が直面する厳しい状況をも考えさせられた。④
會議中に議論が沸騰した問題の多くは、當事者間の用語の不的確さや術語の定義の曖昧さに起因していたように、私には思われる。我々の部會では、各種の外國語を仲介とした研究や討論が多かったので餘計にその問題は起こったのであるが、中國學・日本學の一般論としても、日・中兩國語の概念の研究が更に深められることが望まれる。その時、フランス語への反譯は良いヒントになろう。

我々主催者側は、このコロックを、専門家とか學生とかを問わずに全ての人々に開かれた會にしようと努力した。その結果、參加者の所屬の大學や研究所や経歴は實に様々であった。日・中の宗教の専門家達が、延べ三百人近くもが、東京からかなり離れた伊東市郊外まで、わざわざ、しかも手辨當でやって来て、言葉の不便をも忍んで、フランス人學者達と數日間共同生活を送ったのである。この事實は、東洋學第一部會の會議内容が如何に魅力的であったかを示し、成功裡に終わることを證明するものであった。

ここに第一部會の企畫運営に當った人々を代表して、協力を惜しまれなかったフランス側代表團に厚く御禮申し上げたい。同時に又、種々の援助を賜った公私の諸機關、寺社等諸宗教團體の各位にも深甚の謝意を表したい。ここには列記する餘裕はないが、關係者の芳名も含めて、今回の學術シンポジウムの詳細は、いずれ刊行する議事録に掲載する豫定である。

（日本側責任者：福井文雅）

1985年のパリでの前回コロックに較べると、今回は規模が遙かに大きくなっている。第一部會では、日本の傳統的宗教である佛教と神道を研究し、また同時に、兩者の交渉形態を中國の道教および儒教との關係から検討しようとするものであった。このテーマは極めて重要でありながら未開拓であり、現學界ではむしろ輕視されている。その研究は、歴史や言語についての我々の知識の缺落を單に補ってくれるばかりではなく、中國と日本の兩國社會の理解に新しい局面を示してくれるのである。今後數十年の極東諸國間の關係を考えると、宗教が大事な役割を果たすことは確かである。その意味で、我々の研究は、過去

の歴史研究のテーマは多くても、現代に連なる要素を含んでおり、またそれが故に、今回の會議でも我々の部會に、あれほど多くの優秀な専門家が集合したのである。

フランス側参加者にとって、日本學と中國學の分野で高名な日本人研究者が参加して下さったことは幸いであった。この機會に、貴重な資料を交換しあうことができ、また、活發な議論を通して方法論上でも得るものが多かったからである。アプローチの仕方は違ってはいても、お互いの歩み寄りの近さは確かに感じられた。とりわけ、かくも多くの、優秀な、専門知識豊かな學生達や若手研究者が、今回のコロックに出席していることは誠に喜ばしいことであった。1972年に蓼科で開催された道教研究國際會議（道教研究の分野では、日本人學者と歐米人學者との最初の會合）の當時を思い起こすと、今昔の感がある。我々の部會の仕事は今後も繼續して行く。

様々な點で、今回のコロックは成功であったと言える。この成功は、日本側責任者である福井文雅教授の優れた組織力と、事務局の方々、なかでも山田利明・前田繁樹・田中文雄三氏の獻身的努力とに依るものであり、ここに衷心から感謝申し上げたい。

部會代表者の酒井忠夫教授が、あらゆる面で絶えざる努力を盡くして下さったこと、その貢獻度の大きさを我々は忘れることなく、深く感謝するものである。

餘りにも多すぎて一々は芳名を述べ難いが、その他、コロックの成功に協力下さった方々全員に對して、フランス側参加者は同じく御禮申し上げるものである。

（フランス側責任者：クリストファ・シペール）

〔附記〕以上の他に、筆者福井は中國・廣州での「紀念陳寅恪教授國際學術討論會」にも出席したが、それについては『東方學』第77輯（1989.1）に同名の學界消息を寄稿しているので、それについても本稿で書くことは省略した。

なお、今回の中國域外漢籍國際學術會議は、今年の7月1～3日にハワイ大學で開かれる。